



「2つ」の図書館

橋本英俊（専任講師 国際金融論）

本学に通う学生諸君にとって、「2つ」の図書館と如何に向き合い、これを活用するかが、大学生活から得られる充実感を占う鍵となっているといっても過言ではない。両者は規模が大きく奥が深い点で共通する一方、そのうち1つには「～図書館」ではなく、町の名が冠されている。そう、「2つ」の図書館とは、「日本大学経済学部図書館」と世界に誇る本の街、「神保町」を指している。

私にとって、「2つ」の図書館との邂逅の場面は、今でも鮮明に思い起こすことができる。神保町にはじめて立ち寄ったのは、本学を受験した帰り道のことであり、丁度「神田古書祭り」が催されていた。神保町交差点脇の会場には、様々なジャンルの書籍が棚に溢れんばかりに積み上げられ、老若男女がひしめき合い、目当ての本はないかと真剣な眼差しを注ぐ様からは、この地域の纏う知的な佇まいとともに、4月以降待っているかもしれない大学生活への期待感に胸を膨らませ、興奮を覚えたものであった。

一方、経済学部図書館に足を踏み入れたのは、入学直後の図書館利用ガイダンスの折である。先ずは一つの学問領域を中心とした蔵書により構成される図書館の存在感に圧倒され、ガラスケースの中の希少本に目を見張った。そうして、図書館員の説明に耳を傾けるうち、大学生活を大いに楽しむにしても、学問を疎かにせずに過ごそうと覚悟したことが脳裏に蘇る。

以上のエピソードは、「2つ」の図書館の、学生の気持ちに働きかける効能の一端を紹介したものであるが、具体的な図書館の活用術についての私からのアドバイスは一言、「困ったときは図書館に聞け！」に集約することができる。大学教育では、自ら課題を見出し、勉強を進めていくことが求められる。ましてや経済学とは、社会活動全体を分析対象とする学問であり、当時の私自身、講義の内容を一度では十分に把握しきれず、追い詰められた気持ちを味わうことも少なくなかった。

このようなとき、「図書館に聞いてみる」のである。例えば経済学部図書館には、「ミクロ経済学」や「マクロ経済学」のテキストだけでも様々なタイトルが揃えられており、授業についていけないと感じたときは、自分のレベルにあったテキスト

を探し、その後徐々に発展的なものに臨んでゆけばよい。また、応用的な内容に挑戦したい学生にも経済学部図書館は応えてくれる。Webベースの「電子ジャーナル」を活用すれば、最新の研究成果に触れられるとともに、電子ファイル形式で取得可能なデータベースを利用すれば、自ら実証分析にも取り組むことができる。

一方で、じっくり向かい合いたい本が見つかった場合には、常に手元において、重要な部分に線を引くなどしながら読み返えしたいものであるが、そのような欲求を覚えたときには、「もう1つの図書館」、神保町に聞いてみることをお勧めする。上手く探せば、最近の本も格安で手に入れられるだけでなく、少し視野を広げれば、芋づる式に周辺分野の書籍や古典にも巡り合える可能性がある。更にはある人が、「神保町周辺の出版業（教育機関も含まれるだろう）に携わる人は、お金はないが味にはうるさいから、この町には安くて美味しい店が多いのだ」と、表したように、こちらの図書館には、足が疲れたり空腹を感じたときのための、学生に優しいカフェやレストランまで完備されている。

冒頭に述べたように、大学生活の充足感は「2つ」の図書館との向き合い方、活用如何に少なからず依存している。社会に巣立つ直前のこの時期、悩むことは間違いなく多い。そのようなときは、「2つ」の図書館に遠慮なく尋ねてみよう。対人間と同様、聞き方には注意しないとならないが、工夫すればきっと応えてくれる。私自身、今も頻繁に相談に乗ってもらっている。私を「2つ」の図書館で見かけたときには、先生も色々悩んでるんだなど、身近に感じてもらえれば幸いである。

